

## 質疑・総合討論

○西 どんどん拡散していきそうなのですが、あと1時間ちょっとありますので、僕なりにもう一度整理しておくことにします。まず今、浅野さんの話を受けて朴さんがおっしゃったことの中で、実証主義や近代への向きあい方といった話は、歴史家の方々から介入していただければいいと思いますので、僕のほうでまとめることはいたしません、「反戦」が「反支配」を抑圧してしまったのが日本の戦後だという、その話ですね。これは立命館大学にいる僕らからすると比較的わかりやすい話で、もう亡くなられましたけれども、西川長夫さんが国際言語文化研究所を立ち上げ以降ずっと支えてきてくださって、その西川さんが使っておられた「植民地忘却」という切り口はまさにそれでした。日本が戦前に行っていた植民地支配の経験は日本の敗戦に伴うアメリカによる日本の植民地支配のもとでそれ自体を見ないようにする、つまり日本人が今度新しくアメリカによって植民地化されてしまったということを見ないことの代償で過去の自分たちの支配のほうも見ない、二重の忘却というのがそこで起こっているんだということを見ない、非常に強く主張されていました。さらに、西川先生の場合はフランス研究者でいらっしゃる、その「植民地忘却」の問題はフランスにもあるということですね。しかも西川さんがおっしゃるのは、京大に入ってフランス文学を始めたときに、ABC（アーベーシー）を教えるフランス語教育なるものがいかに抑圧的で、国民をつくり上げる、あるいは文明人をつくり上げる装置になってしまっているかという、それが西川先生の反骨精神の出発点にもなったということでもあって、つまり日本の植民地支配、日本に勝ったということを理由にしたアメリカの占領に伴う日本の改造、それからフランスがアルジェリア等を植民地化してからもずっと行っていたネーションビルディングという大きなプロジェクト、そういったもの全体をどうやってひっくり返していくのかというのが西川さんのベースにある問題意識だったわけです。ですので、今日の浅野さんの指摘と朴さんのそれに対する応答というのは、そういった流れを念頭におけば、かなりのことが説明できるんじゃないかなと思います。聞きながら聞きました。

それからドイツに関しては、とくに難民についてなんですが、これは最近よく話題になることですが、メルケル首相がこの間シリア難民を受け入れるに当たって、それに対してナショナリストと言うのかわかりませんが、批判的な人たち、排外主義的な人たちを説得するときにはしばしば使った歴史認識は、「私たちもかつては難民だったではないか」という言い方なわけですね。つまり今日も話が出たように、東ドイツでは4人に1人、西ドイツでも5人に1人がかつて「被追放者」あるいは「難民」であったと、そういう人間を受け止めることで戦後のドイツの復興は成り立ったのであると。だから、その過去を振り返るのであれば、新しい難民を迎えることに対して私たちは積極的でなければならぬと、そういう言い方をするときには多分 Fluchtling（難民）という言葉をあえて使っているんだろうというふうに思いますけれども、そういうこれはある種のレトリックで、そのレトリックがどこまでドイツを支えていけるのかは、これからの展開を見ていくしかないとはいえ、そういうふうな過去の歴史をこれからの進むべき道につなげていくような知的営為が、少なくともドイツにはある。このことを、僕は最近目につく出来事として心にとめているわけです。それに対して、日本人が排外主義から日本

を救うためにこれからどれだけ引揚者の経験というふうなものを生かして、そういう論理というものをつくり上げていけるのかというのは、これは我々に課された課題だろうというふうにするので、過去への謝罪の有無ということも含めてですけれども、ドイツから日本が学ぶべきことというのは多分たくさんあるだろうと思います。ただ、ドイツの謝罪が日本に欠けているものを全てカバーするものであったかどうかという議論は、これも確かに重要だろうと思いますし、実際ドイツの謝罪の大半は、ユダヤ人に対する謝罪に費やされてしまっていて、それ以外は逆に冷戦構造の中でうやむやにされてきてしまったという、そういったふうなこともあるので、そういう意味でのドイツと日本の比較は、いろいろな意味で今後もなされていかなければいけないし、単に研究上の問題としてではなく、日本のとるべき態度というものを考えていくときに、どれだけドイツが参考になるかということだと思えます。

それからもう一つ、「故郷権」の話は僕も新鮮なものとして受け取りましたが、これを単に引揚者あるいは北方領土から日本に追い返された人々が北方領土に戻りたい、あるいは満州に戻りたいと、そういう問題としてだけではなくて、多分在日の人たちに向かって国へ帰れというふうに言うような排外主義的な日本において、在日の人たちが「故郷権」なるものを主張するというときに含意されるもの、そういうことも込みにした問題設定というのが多分必要なのかなと思って聞きました。

その後、朴さんから質問があったので、後で佐藤さんと永畑さんにはお答えいただきたいんですが、ドイツの謝罪の有無と比較的豊かな語りが残されているということとの間には何があのかというのは興味深いです。

それから、田中さんの話に対して名前を上げられた林志弦さんのことですが、僕は彼の書いたものを数多く読んだわけじゃないし、むしろ原さんが林志弦さんの論文を翻訳したと言っていたので、後で原さんからコメントいただければと思います。林志弦さんというのはポーランド史の研究者で、しかも今韓国では歴史家の中でもかなり重要な存在で、これは僕の仲間もそうなんですが、昔東欧研究している人というのは本当にマイナーで、たいした居場所もなかったんです。ところが東欧革命が起こって以降、僕の仲間だった人がどんどん就職できるようになって、つまり東欧史がヨーロッパ史の王道であるかのような時期があって、それと同じで多分林志弦さんもポーランド史をやってらして、最初はそんなことで就職できるのかなと思ったような時期もあったんでしょうけれども、東欧の解放と、あと韓国自身の民主化というのがあって、そういう中で育まれてこられた歴史家でいらっしゃるんだと思うし、当然韓国人でポーランドを研究されるということになると、日本の植民地支配を受けていた韓国の歴史というものを当然お考えになるわけでしょうし、ポーランド人がドイツを見るように、林志弦さんは日本を見ていらっしゃる、その中でいろいろな比較がなされてきているんだと思うので、そういう意味で朴さんと林志弦さんの間にちょっとした断絶が生まれているんだとしたら、何がそこにあるのかというのは、ある意味ではおもしろいテーマかなというふうに思いました。

最後に一つ、中心と周辺ということで、これはやっぱりよく議論され、ベネディクト・アンダーソン以降に議論されてきたこととも関連すると思うんですが、中心と周辺というふうに言ったときに気をつけなければいけないのは、むしろ周辺にあってこそ遠隔地ナショナリズムというんですか、逆に自分たちの周辺性というものを覆す、あるいは否認する動きというのが出てき

てしまって、それがある意味でナショナリズムの原動力になっていくという、そういうある意味でパラドクサルですけれども、そういうことが起こるので、それこそ標準語の問題もそうですけれども、標準語をしゃべれないと日本人として恥ずかしいということをたたき込まれたのはみんな植民地の日本人で、大阪の人なんか全くそんなことは考えもしないで、のうのうと関西人をつづけていたんだと思います。けれども、そういう周辺と中心の弁証法というんですかね。そういうのもひとつ考えるべきことかなと思いました。

それじゃあ、浅野さんから順番に、朴さんのお話に対する応答をお願いします。

○浅野 朴先生、ありがとうございました。

一つ気になったのは、ドイツと日本の比較を韓国の方がよくされることです。朴先生が裁判において今直面しているのは、ホロコーストを否定する言説は許さないという批判です。それに対してどう対処するかということばかり考えつつ、さっきから聞いていました。アメリカとの関係で反支配の記憶が語れなかったという指摘は、あの西川先生がされていたのだということについても、改めて研究史を押さえることの大切さを教えていただきました。

さっきの問題を自分なりに整理すると、一つの観点は、ユダヤ人とポーランド人は、ドイツ人と全く別な存在として迫害され、虐殺され殺されているのに対して、朝鮮人というのはあくまでも大和民族と朝鮮人・台湾人が合わせて日本国民だという形式上の枠の中で戦争に動員されていた点です。もちろん実際は朴先生が描いていらっしゃるように、さまざまな微妙な差別というのが生活の中には存在していたんですけれども、少なくとも小さい町の中で共存していたりとか、あとは兄と弟の関係みたいなイデオロギーの下で、少なからずドイツとユダヤのような完全に隔絶した状態じゃない形で戦争に動員されている。だから逆に言うと、ユダヤとドイツ、ドイツによるユダヤ人虐殺と同じ形で、今度は韓国人の強制連行、韓国人の中の一番悲惨な韓国人慰安婦対日本帝国主義みたいな形で議論を出されると、日本の中でナショナルな反発が起こってしまうわけです。それは天皇制とナチスの体制ということにもかかわるのかもしれませんが、もっと微細にとらえていくことができれば、そういう反発ももう少し整理して受け止めることができるのかもしれないけれども、丸ごとのナショナリズムの対立が一気にそこで起きてしまう構造があります。日本対韓国の関係を、ドイツ対ユダヤみみたいなものが対峙するんじゃない形で、いかに歴史的にとらえることができるのかということをお朴先生は試みられていて、それが往々にして修正主義というレッテルを張られてしまうわけです。それをわかりやすく表現するにはどうしたらいいかということをお質問させて下さい。つまり、日本の国民として朝鮮の方も動員されている、「だからあの時代は日本人みんなが苦労したんじゃないか」、「日本の看護婦もいれば日本人慰安婦もいたんじゃないか」、そういうコメントに象徴されるような日本のナショナリズムを誘発しない形で帝国主義への反省というものを喚起していく手法、ドイツとユダヤとは異なるモデルを提示する課題とも思うんですけれども、もしも朴先生が今の時点でそれに対してわかりやすく簡単に答えられるとしたらぜひ教えていただきたいです。他の皆さんの中でも、どのように整理したらいいのかヒントをいただければと思っています。

もうひとつ故郷権という言葉も興味深く受け止めました。私は愛知県に15年住みまして、ブラジルから帰ってきた沖縄系のブラジル人の方に身近で接しました。元日本人で沖縄人だった

んだけれども、ブラジルで生まれて、先祖が日本人だったということで愛知県で働いていた方々です。1年に1度、地元の豊田市でお祭りがあって、そのときにはブラジルのサンバのお祭りを衣装とか着てやってくださいました。やっぱりブラジルに帰りたいですよという話を伺ったことがあります。私の子供たちも同じ小学校でした。PTAで活動した際に、いろいろな個別な話も伺ったんですけれども、やっぱり人間は本能的に生まれ落ちた空間というものに帰りたいという本能があるのだと思います。それはブラジルの日系人のみならず、私の子供たちも同じです。子供たちは愛知県をもう故郷と見なしていて、お前たちの本籍は福島なんだと幾ら言ったところで、やっぱり故郷は愛知県だと言っても譲らないわけです。動物がその巣に帰っていきみたい、そういう本能が人間の中にあり、一種の故郷へのノスタルジアみたいな感覚となって表現されるのだと思います。それを無条件に肯定するか、それとも禁欲的に受け止めて、その意味を歴史や社会の変化の中でいかに考えるのかが大切です。これは追加のコメントでした。

○田中 朴先生からご指摘を受けて、なるほどなと思ったのは、戦争を考える上で、非常時だけではなく、戦争の延長として、平時の日常生活をも問題にしていく必要があると、そうおっしゃられていたことです。ポーランド文学の話をする、同じような視点から戦争を描こうとしていた作家に、ヴィトルド・ゴンブローヴィチがいます。ゴンブローヴィチが30年代に発表した短編小説に「ステファン・チャルニェツキの手記」というものがあります。これはチャルニェツキという男が兵士になり、戦場を経験し、帰還するまでを描いた作品です。1918年にポーランドは独立しますが、その直後にソ連との間で戦争が勃発します。主人公が参加するのはその戦争なんです、しかし、そこには戦場の場面はほとんど描かれていません。では、何が描かれているのかというと、戦場の前後なんです。例えば、主人公は、少年時代に、学校の教室で、ポーランドの文化の素晴らしさを教師たちから叩き込まれます。学校教育を通じて、生徒たちは愛国心を植え付けられます。あるいは、街に出ると、制服を着た兵隊さんの姿を男らしいと褒めそやす女性たちがいる。主人公の恋人がそのひとりだったんですが、そんな彼女の期待に応えようとして、チャルニェツキは兵士に志願するんです。ひとりの男が兵士になる背景には、戦争を後押しする大人たちや恋人たちがいる。人間を兵士に作り上げていくプロセスとして、戦争を考えていく必要がある。学校と軍隊をひとつつながりの国民化装置として考えていく必要がある。朴さんのお話を伺って、そのようなことを考えました。ほくからは以上です。

○永畑 謝罪と語りの豊かさに関する質問をいただいたわけなんですけれども、西先生もおっしゃっていたように、ドイツの謝罪というのはどちらかというとユダヤ人に向けられているのが大部分だと思っていて、レンツとかグラスの話のときに、ヴィリー・ブランドがワルシャワ条約調印のときにポーランドへ行って、そのときにひざまずいての謝罪を行ったという、そういうパフォーマンスが話題になったわけなんですけれども、それってユダヤ人に対する謝罪であって、ポーランド人に対する謝罪ではなかったわけなので、周りにいたポーランド人はしらっとしていたとか、そういうふうな話も聞きますし、ユダヤ人に対する謝罪は本当に熱心に取り組んでいたのかなと思うんですが、チェコとかポーランドに対しては不十分な部分も多いのではないかと考えています。先ほど佐藤先生のお話にも出てきた被追放者連盟もチェコとかポーランドとかに対しては故郷にある財産権を強く主張したりとかするんですけれども、例えばロシアに対してはそういう主張をしない、ロシア領に現在なっているもともとドイツの旧東方領土



だったところに関しては主張しないとか、そういうところもあって、何だかチェコやポーランドに対してばかり強く出るようなところがあると感じるので、どのぐらいのレベルのことをすれば謝罪が十分であるというのかちょっとよくわからないんです。ですから本当にチェコやポーランドに対して十分な謝罪をしているかどうかというのはちょっとよくわからないかなというふうに思っています。

語りの豊かさと謝罪との関連に関して、朴先生のご本の64ページのところを読んでいたときに、後藤明生の言葉で、日本では化学的変化を起こしていないという話がありましたけれども、国家観念とか民族意識とか、そういうものに全く化学変化を起こしていないという点に関して、例えばドイツの場合はどうしても議論を深めなければならない状況があった、日本はそうではなかったとちょっと私は感じていて、というのは、朴先生のご本の中でも本籍地の話が出てきていました。本籍地が福岡であるとか島根であるとか、そういうことが日本人であるということの証だったとか、そういう話ですが、つまり内地と外地という観念がしっかりしているというか、戦前と戦後で余り変わっていないというか、植民地支配をしていた時代でも、ここが植民地でここが内地ですよというのが日本の場合はある程度クリア、それがそんなに戦後になっても変わらなかったというのがあると思うんですけれども、ドイツの場合は13世紀以降ドイツ人って東方植民を行っていたわけで、何百年も前からドイツ人が東方の各地域に点在して住んでいたわけなので、今現在のドイツの国境というのができたのって本当にごくごく最近で、なのでどこからどこまでがドイツなのかということも議論してつくっていかなければならないという状況が戦後にはあって、日本の場合はそうでもなかった。もちろん北方領土とかどこまでが日本なのかというのは、もちろん完全には固まってははいないことですが、ある程度内地と外地というのがはっきりしていたので、そこに関する議論をまずする必要がなかったということがありますね。日本の場合の引揚者というのは基本的には植民地から引揚げてきたという意識があったと思うんですけれども、ドイツ人の場合はナチス時代に帝国を広げるためにナチス時代になってからももちろん東欧に行った人たちもいたわけですが、もっとも何百年も前から先祖代々東欧の地で暮らしていた人たちも、みんなドイツ人だと思われる人は今のドイツのほうに移住させられることになったわけなので、国境線がどうなのかということもそうだし、日本の場合は罪の帰結としての故郷喪失というのがある意味でドイツに比べるとある程度クリアだったんじゃないかと思うんです。ドイツの場合は、植民地支配しようと思って東欧に行ったわけではなくて、何百年も前から先祖代々暮らしていた人に関しては、自分たちが罪を犯したから追いやられたんだというふうに認識しづらかったと思うんです、日本の場合に比べると。なので、自分たちを納得させるためであったり、国際社会において自分たちの位置をはっきりと定めるために日本の場合より議論をしなければならないという状況が大きかったんじゃないかなと思います。なので日本の場合は何となく過ごすことができていた部分が、ドイツの場合はとにかく新しくつくっていかなければならないものがいろいろとあって議論せざるを得ない状況というのもあって、それが結果的にこの問題について語る場の多さにつながっていったということがあるんじゃないかなというふうに思います。

○佐藤 ご質問ありがとうございました。

とても重要な謝罪問題、僕は先ほどの報告のときに全く触れませんでしたけれども、極めて

重要な問題というか、これはドイツのこと少しでもやっている人であればかわらないわけにはいかないですね。重要な問題です。これは研究者によっていろいろな見方があるので、僕の見方が正しいかどうかかわらないんですけども、僕はドイツに関して言うと、最初から謝罪していたというわけではないと。むしろ50年代は日本の知識人がよほど謝罪しているとか、よほど過去に対して批判的だと思っています。50年代のドイツの人たちというのは一部ラディカルな知識、左派系の知識人なんかは。左派系というかな……。

○西 それは西ドイツですね。

○佐藤 西ドイツです。例えば若いころのギュンター・グラスとかですね。しかしそういう人たちはごく一部なんです。50年代のドイツの一般の状況としては、過去に関しては沈黙することが多かったと思います。その後60年代に大転換がくる。これはもう政治文化の大転換と言っていいと思うんですけども、いろいろな映画なんかにもなっています。親の罪を暴いたりとか、自分の先生の罪を暴いたりとか、教室の中や家族の中でナチスの過去をいろいろ暴くという、そういういろいろなドラマがありました。これはこの世代のドイツ人の多くが経験していることだと思います。こうして60年代に大きく変わって、60年代、70年代とドイツは過去に関して非常に厳しく語るようになったと。ただ、そこで注意しなければいけないのは、謝罪と一言で言いますが、2つの種類の謝罪があって、1つは、これは政府が公式に言うものなんですけれども、こういうことです。ドイツ人民には罪はない。しかし、ドイツ民族の名のもとに罪を犯したナチスの責任を我々の世代が負わなければいけないと。だから罪と責任を分けるんですね。だから責任は我々にあると、これは認める。しかしドイツ人民に罪はないんだというものです。これは連邦政府などが公式にとってきた立場でもあります。これはドイツ人の謝罪や補償に対して反対の人たちに対する一種の緩衝材といいますか、バッファーになっていたと思います。ただ、しかしそれは表向きの顔で、インフォーマルには、やはりドイツ人には罪があるんだということは、例えば学校の教室とか、そういう中では言われてきた。特に60年代に教育を受けた世代の人がギムナジウムの先生になると、過去の克服というのがドイツの政治教育の中でも非常に重要なテーマになる。これが繰り返されることにより、ある意味一種のクリーシェといいますか、ナチスの過去についてはこういうふうに語らなければいけないと、ある種の自明の公共の規範のようになってきます。するとそれを疎ましいと思う人も結構出てくる。例えば一つエピソードを話しますと、随分前ですけども、ドイツの友人とドイツの映画を見て、一緒にドイツ語を学ぼうと思って、じゃあどの映画を選ぶかという話をしたときに、彼は僕と同じ歳ぐらいの世代なんですけれども、頼むからナチスがテーマの映画はやめてくれと言うんですね。学校でさんざんドイツ人には罪があるんだと言われてきたので、もうあのテーマの映画は見る気がせずほかの映画にしてくれというんです。その人は別に特に反動的な右翼でも何でもなく、社会民主党の支持者でした。こういうドイツ人を産み出すような風潮が70年代、80年代とあったと思います。2000年代に入ってそれは少し変わってきて、それが先ほどの追放に関するルネサンスといいますか、語り直しにつながって行って、ドイツ人の被害の、被害者としての歴史を見なおそうという動きになっているのかなというふうに思いますね。

それから、先ほど故郷権がなぜ語られたかということですが、故郷権ということが最初に公式に表明されたのは1950年なんですね。被追放者の有力な政治家が集まって被追放者憲章とい

うものがつくられました。それは今でも被追放者連盟のホームページ見ると載っています、サインつきの生の原版をスキャンしたものを載っていますね。非常に珍重されているわけですが、そこに神が全ての人に与えた故郷権という言葉が出てくるんですね。神様が出てくるといところがちょっと時代を感じさせるんですけども。当初は、それでその故郷権により当然自分たちは故郷に帰る権利があるんだということを主張するわけなんですけど、その段階では、特に被追放者の人たちが自分たちの経験をナチスの罪と結びつけて語るというモードはなかったと思いますね。それとは関係ない話として、ナチスはユダヤ人虐殺のようなひどいことをやっていたというのは50年代は大体認識されているんですけども、元ナチスの人がたくさん例えば法曹界とか官僚とか、あるいは歴史学者なんかでも戻ってきていて、ナチスの問題は占領期の「非ナチ化」でけじめがついていると考えていた人が多かった。そのようなこともあり、被追放者が自分たちの故郷権なり故郷を失ったということと結びつけて理解するということは50年代に余りなかったと思います。それがだんだん、先ほど永畑さんの報告にあったように、過去の問題に対峙するということと、自分たちの領土喪失を領土を諦める、自分の故郷を諦めるということが、ある種道徳的に連動して理解されるようになってきました。これが大体60年代、70年代ぐらいですね。それで故郷権という言葉は、過去の克服を否定する、つまり歴史修正主義で報復主義な言葉だというふうに見なされるようになっていくというような、そんな経緯があるのかなという感じですね。ここら辺でよろしいでしょうか。

○朴 詳しい説明をありがとうございます。謝罪と被害意識の関係についてある程度理解できました。やはり、「故郷権」という言葉は、単純に理解してはいけないうですね。

さっき、一人でしゃべりすぎたようで省いたのですが、鶴戸さんがきょう見せてくださった資料もとてもおもしろかったです。130年間をまとめるような本が出たということが、まず、フランスとの関係において、アルジェリアの人たちの間で過去清算という意識はあるのかどうか、あるいはそれは済んだこと、と考えられているのかどうか、さらにそうしたことが国民の間で一般認識になっているのかどうかを伺いたいです。

いろいろとおもしろい話を伺いましたが、例えば埋葬の話もおもしろくて、二世がお父さんやお母さんを、かの地に埋葬するための努力をするということなどです。少なくとも私の知る限り日本ではそうしたことはなかったように思います。実はそうしたことに関して『引揚げ文学論序説』でもちょっと触れていますが、日本の場合、息子が父親をそこに埋めるのはいけないというふうにする場面があります。そして私はそうしたことは息子の権利を超えたことだと考えました。そういう意味でもとても重要な問題だと思いますし、さらに言えば、北朝鮮は言うまでもなく、韓国にも植民地時代に亡くなった日本人の墓が結構あるようですが、ほとんど意識されていない。韓国戦争のとき壊されたところもあるでしょうし、恐らく知らないうちに破壊されたところもあるのではないかと思います。そういったことが日本でも今のところ認識されていなくて、引揚げのとき北朝鮮で亡くなった方々が埋葬されている空間だけが日本では意識されています。そういう文脈から、例えばアルジェリアの方がそういう試みをするということは、亡くなった後の身の置き方についての特別な考え方があるのかどうか。生きて暮らしていた場所＝死んでからの場所＝故郷、といった考え方があるのかなど、その地独特の考え方があるのかどうか、もしお分かりでしたら教えていただきたいです。それから、その

ことにちょっとつながる話ですが、そうしたことをやましいというふうには思わない、とおっしゃったように思いますが、その両方の考え方が同時にあり得るのかなと思うのです。きのうの言葉で言えば、そうした選択を、無頓着、あるいは、やましいというふうには思わないような見方も必要である反面、せめて亡くなってからでも行きたい場所へ行かせてあげる、この両方の兼ね合いを、私たちは多分今後も模索していくべきではないかと思えます。

さらにちょっと関係ある話かと思えますが、国籍を剥奪したという話もされてました。1952年に、在日朝鮮人の国籍剥奪もありましたよね、日本では。そうした違いはどういうことなんだろうか。逆に今過去の植民地時代はよかったとか、別に併合であって植民地ではなかったなどと、強く主張している人たちが一方にいて、そうしたこともつながる話ではないかと思えます。コロニーという言葉を言わないということも多分つながるのであって、そういうこととの関係はどうなっているのか。つまり、日本と比べてときに日本における剥奪と、アルジェリアにおける剥奪しないことの違いはどうして生まれていたのか。ご意見があれば教えていただければと思います。

○鶴戸 ありがとうございます。

独立後の政権を握ってきたFLN（国民解放戦線）が結成される以前からアルジェリアのナショナリズム運動というのは長いこと続いていたんですが、ある種の平和的に進めていく運動、特に同化を進めてフランス市民と同じ権利を主張していくとか、平和的に独立を果たすという運動が全てつぶされていって、主要なナショナリストの指導者が全員逮捕されてしまった最後の最後で、ある意味若いはねっ返りがFLNをつくってから武力闘争に入っていくという流れがあって、実はほかにもいろいろな政党があって、中で殺し合いをしながらやっています。結局その後独立後のFLNの単独独裁体制ができる中で、ある種の国家理念というか、政権の正当性というのが独立闘争を勝ち取った我が党がアルジェリアを率いているということなので、政治体制上の要請としてフランスから独立を勝ち取ったということは揺るがせにできないものであって、だから国家的にはいまだにフランス政府に謝罪を要求しているし、例えばフランスの大統領がアルジェリアを訪問するときには、そこでどういう言葉が出るのか、逆にアルジェリア大統領がフランスに行くとき、どういう言葉がそこで出るのかというのが常に問題になるということはあるんです。基本的にフランスは過去の清算がほとんどできていない状況で、ナチスとの関係もアルジェリア戦争の問題も全然解消されていない状況です。例えば96-98年にパボン裁判というのがありましたが、このモーリス・パボンはヴィシー政権下でどんどんドイツのほうにユダヤ人を送った人物です。戦後はパリ警視総監になって、61年のアルジェリア人のパリでの独立デモ、大きいデモがあった。けれども、この際に警察に発砲させて多数の死傷者を出してセヌ川に死体が浮かぶというような事件を起こしている人物なんです。その彼にユダヤ人移送の刑事責任を認める判決が下されるのが98年という状況で、フランス政府がアルジェリア戦争を戦争と認めたのが99年かそこらだと思います。それまでは治安維持活動であって戦争ではないというのがフランス政府の公式見解のままでした。フランスの側で戦ったアルジェリア人兵士「ハルキ」に対するフランス政府の認知が進むのも21世紀に入ってからですし、アルジェリアに住んでいたフランス人たちにも故郷から追放されたという、むしろ彼らが追放されたというのは一種の神話であるということはこの十数年、例えばドキュメンタリーなんか



で、残留する選択肢も実はあったということがかなり歴史学的に主張されるようになってきているんですけども、このときに彼らは国籍の選択を迫られたわけですね。アルジェリア国籍をとればよかったんです、実は。実際にとった人もいます。ただ、多くの人がアルジェリア国籍をとらず、フランス国籍を放棄せずにフランスに戻ったということです。追放神話の中で、どっちかという被害意識とかトラウマがつよく、このやましさは全くないわけではないんですけども、かなり薄いようです。特にアルジェリアの植民地支配は、それは植民地支配で歴史的に見れば悪いことだった、でも当時はそれが普通だったのだし、記憶の中ではいかに家族のすばらしい記憶がそこにあるのかということがむしろ語られて、かなり肯定的ですばらしい生活がそこにあったというノスタルジーが語られ思い出され、それが今子々孫々に語り継がれていて、日本人が今台湾なんかに里帰りをするような形で、アルジェリアに行って昔住んでいたところを回るというのがはやっている状況があります。なので、割とその辺の変な意味での屈託のなさというのがあるって、そういう意味では逆に文学作品の中でつくっていかないといけないようなインセンティブがもしかしたらなかったのかもしれない、だから「アルジェリアがフランスだったとき」みたいなものはいっぱい出ているんですね、そういう時の本とか。それで、どちらかという、家族のルーツをたどる旅みたいなもののほうがはやっている。これは研究でもまさにバンジャラマン・ストラが自分のユダヤ系の家族の話を歴史家としてずっとたどっていくファミリーヒストリーの本なんかを出しているというのがあって、やっぱりかわりがあった人たちが物すごくたくさんいて、それが過去をどんどん探していくというので、若干今の台湾での日本時代ブームみたいな感じのものがいっぱいずっと出ているというのは、それはアルジェリア側でもそうだし、フランス側でも実はそれが行われているという感じがして、文学作品では現地のムスリムとヨーロッパ系の人間の交流というものを一番政治的な意図で書いたというのは実は20年代ぐらいのアルジェリアニストという、ある種のパリ文壇に対する独立意識を出して、新しい人間としてのアルジェリア人というのを主張するような植民地育ちの文学の中で書かれたのが、もう少し後に30年代の初期のカミュとかの時代とかになってくると、むしろそれが失敗してなくなっていった、結構ヨーロッパ人だけのコミュニティの中での話というのにどんどんなくなっていくという動きがあるように思います。

死に戻るという感覚は、これはムスタファー・ベンフォーデルという作家の描いた「ハルキ」の話なのですが、故郷の外では死んだ後も安らげないと、だから自分の故郷の墓場以外に埋められることはもう永劫の苦しみが続くという、そういうような遺言みたいなものがあって、それでどうにかしようという小説です。死に戻るという感覚は少しあるみたいで、割と2000年代の他の小説でも例えば出稼ぎにフランスに行かずずっと苦勞して何だかんだやって、もう最後に死にに村に帰ってきた男の話みたいなものはあるので、やっぱり故郷で死にたいという意識は結構あるんじゃないかなという気はします。

○朴 ありがとうございます。あとひとつだけよろしいですか、今のお話で。

これは皆さんに質問したいんですけども、「ファミリーヒストリー」という話が出たので思い出したんですが、最近NHKでやっている番組がありますね。たまたま3回ぐらい見ましたが、そのうち2回がたどっていったら朝鮮だったという話で、そういう話がNHKで放送されていることがちょっとおもしろかったです。そうした認識は一般の日本の方々に、あるいは皆さんに、

どのような影響を与えるのでしょうか。後でお時間があれば少し教えていただきたと思います。  
○浅野 関連して質問したいことがあるんですけども、鶴戸さんと、あと佐藤さん、あと永畑さんの報告について本当に勉強になりました。

ちょっと関連して質問したいんですけども、アルジェリア・ナショナリズムというのが反フランスというものを掲げて生き生きと活発に活動しているということはないのでしょうか。例えば、アルジェリア戦争の中でフランスが行ったような虐殺を誇張して過大に宣伝し、また反フランスを素材としてアルジェリアの人たちに訴えるということはないのかどうか、恐らく余りないからこそ逆に簡単に訪問に行ったりできるんじゃないかなというふうには私は素人ながら思ってしまっただけですけども、それについてはいかがでしょうか。

あと、ドイツと日本の対比ですが、ドイツは戦争被害者一般に補償して、その中で追放を迫られてきた人にも手厚く補償し、さらに追放者のみならずユダヤ人にも補償するということをしてきました。それに対して日本の場合は、民間人への補償が全くほとんどゼロで、東京大空襲で手足をなくそうが、また死んでしまおうが何も補償はないわけです。靖国に祀られている方は公務死をした方ですが、公務で戦争に行っても生きて返ってくると恩給年限に達しない場合は一切補償が何もありません。死ねば死亡弔慰金がありますが、死んだ民間人にはありません。ドイツが国内の戦争被害者一般に対して補償をした延長線上に、ユダヤの方々への個人補償が出たというふうには私は理解しているんですけども、そういう理解でよいのでしょうか。

もうひとつ、ブラントの1970年の慰霊というのがあります。これは別な方で妹尾さんという専修大の先生のご報告からの又聞きで申しわけないんですけども、このエピソードは、1970年から15年間ほとんど誰も知らないエピソードとして埋もれていました。しかし、1985年にレーガン大統領をドイツの国立墓地に連れていった際に、SSの隊員が葬られていたことがわかり、それで申しわけ程度に過去にこんなことやっていますよといって15年前の1970年の写真を掲げて宣伝したという話を伺ったことがあります。ですからドイツ自身が意識して記憶政策みたいなものを自覚的にやり始めた契機みたいなものを伺いたいです。

あと、故郷権に関しては、墓参りというのが日本にもあって、北方領土の墓参りがよく報道されます。台湾で生まれた日本人も台湾協会という組織を作って毎年墓参団に行っていました。韓国のほうにはそれができないわけですが、墓参りというのは故郷権の一部なのか、それは人権なのか伺いたいです。永畑さんのほうにも。

○西 じゃ、どなたからでも。

○鶴戸 被害をちょっと多めに言うというのは多少はあって、だからずっと言われてきたのは100万人死んだというやつですね。当時の人口が1,000万人で、うちヨーロッパ系住民が100万人、アルジェリア人が100万人死んだので1割以上死んだと、これはそこまで死んでいないだろうというのが最近の歴史研究では言われています。FLNによって殺されたアルジェリア人も相当いるので、その被害をどういうふうに算定していくかという問題、数の問題は常にあって、45年の大虐殺で2万人死んだのか2,000人死んだのかとか、そういうのはありますが、ただ、被害を多めに言うというよりは、それに打ち勝った英雄としての意義を強調する方向性について、アルジェの丘の上に物すごい巨大なマカーム・シャハダー、つまり「殉教者の塔」という戦争で死んだ人たちの慰霊塔があって、やっぱりこれが国家的なモニュメントになっている。

遺族会じゃないですけども、ムジャーヒーディーン省という、独立戦争で戦ったムジャーヒーディーン、つまり「聖戦士」たちのための省庁があって、彼らがあらゆる特権と権力を持っている。なので、被害というよりはいかに自分たちが戦ったかと、今の自由なアルジェリアがあるのは我々のおかげなんだというメッセージを一番出しているという感じがします。やっぱりフランスの植民地の場合というのはアルジェリアのように武力闘争で独立した方が例外で、ほかの平和裏に独立したところというのは、むしろ親仏政権をつくって独立させていくわけなので、独立後もフランスと非常に密接な関係を持ち続けるわけです。アルジェリアは独立戦争をやったとはいえ軍事的に勝っていたわけじゃないし、フランスが最終的に放り出したところですので、そういう意味では国交断絶したわけでも何でもなし、停戦時からフランス大使がアルジェに常駐していて、結局ハルキも最初はフランスに受け入れないと言っていたんですが、もう大量に虐殺されているわけですね、停戦後に。大体16万人ぐらいたのが結局4万人（家族を入れると9万人）フランスに渡るけれども、6、7万人が殺されたんじゃないかというような話です。そういう中でフランスとの関係はずっと保たれているので、だからフランスは自分から独立した国家がフランスからそっぽを向いたという経験があるいはないんじゃないかと。多分そういうところもやっぱり関係はしていると思います。

○浅野 フランス大統領が行くたびごとに謝罪を迫られるとか、あとまだまだ謝罪は十分じゃないとか、そういうの全然ないんですか。補償が十分じゃないとか賠償しろとか。

○鶴戸 補償なんてしていないですね。むしろハイチが独立したときにハイチに補償させたぐらいですからね。やっぱりそれらの地域ではフランスの政治的、経済的な優位がずっと続いたというのがあって、結局フランスの経済成長の中で労働者が大量にアルジェリアからフランスに渡る。60年代の独立後も、70年代にもフランスの大都市にはいっぱいアルジェリア人の姿があって、建築土木とかの仕事をやっていくというような関係があって、フランスにいるアルジェリア人をどういうふうにも保護するかとか、そういうもう切っても切れない関係がどうしてもあると思います。ただ、最後の砦としてビザを要求はしています、フランス人に。つまりモロッコとチュニジアはフランス人はビザなしで行けますが、モロッコ人はビザをとらないと入れないわけです。アルジェリアはフランス人にビザをとらせるということは一応やっていますけれども、フランスにアルジェリア人は今ほぼ入れないですよ、ビザが出ないので。あとは国際フランコフォニー機構というのにアルジェリアだけは意地でも入っていないという感じはします。でも一番フランス語を使っているのはアルジェリアという非常に矛盾したところを抱えております。

○西 ちょっとその問題ですけども、植民地支配に対して謝罪はもうほとんどなされていませんし、世界的に。賠償は一切なされていない。日本と韓国の間だって別に謝罪、賠償ではないわけですよ。小倉さんがよくおっしゃっているように、だからむしろ北朝鮮と日本が国交を回復するときにお金を払うとしたら、それはひょっとしたら植民地支配に対する賠償かもしれないわけで、それはもう世界史的に画期的なことになるんじゃないかと思うんだけど、浅野さん、そこはどうですか。

○浅野 実は2002年の小泉平壤宣言があって、日韓条約を踏襲することで請求権を放棄し経済協力をすると、もう言っているんですよ。

○西 ジャ、さかのぼってそうなる。

○浅野 詳しく言うと、最近北朝鮮はまた態度を変えて、1965年の日韓条約に準拠するけれども、財産に関する請求権は放棄しても、人的な請求権は放棄していないというふうにまた態度を変えています。人的な請求権というのは何を意味するのかというのはよくわからないんですけども、拉致被害者とか、あとはいわゆる強制連行された労働者に対する何らかの補償ということの意味しているんだと思います。

○西 だからともかく、ヨーロッパの植民地支配はそういうふうな決着のつけ方をあまりしていないということですよ。ドイツはドイツで先ほども話題になったように、個人補償に限定してやってきたと。

○浅野 戦前にさかのぼる請求権をお互いに相互放棄してゼロとみなして、でも日本側は一方的に経済協力をする。その請求権を放棄したということと経済協力を一方的にするということがどんな関係なのかというのが実は玉虫色なんです。日本側の解釈は何の関係もない、でも韓国側は無償経済協力は、韓国が持っていた請求権の代償であるという解釈をして今に続いています。なぜ日本側でその2つを結びつけなかったかという、要するに日本人引揚者が朝鮮に残してきた在外財産を、今度は日本人引揚者に補償する義務が出てくるからです。その義務が出ないように、戦前に由来する請求権は、一切お互いに放棄するという枠組みをつくったんです。実際には、無償経済協力の枠の中で、三・一独立運動とか義兵闘争で抗日運動をした人をたたえるための財団を韓国は作っています。子孫の方を毎年いろいろな義援金つきで英雄としてたたえる事業をしているんですけども、その財団が無償経済協力から生まれたことを日本側も知ってはいるんですけども、その辺はもう関知しないという感じです。

○朴 今の話に関連づけて、質問を簡単にしたいんですけども、きのう中山さんの話にでた、サハリン研究者の方の話で、本当の意味でのポストコロニアル的な状況というのは意外とないという話がありました。むしろ韓国とか北朝鮮というのはそれなりの国家づくりをしてやってきていて、日本でもいろんな思考が生まれたと。そういう意味で過去に対する謝罪などの考え方は本当は日本を中心とするこの辺にしかないというようなことをおっしゃっていましたね。そういう考えについてヨーロッパの研究者の方々はどう思うのかちょっと伺いたいです。ヨーロッパではポストコロニアル的な状況が、思想的な面や政治的な面で考えたときにあるのかなのか、比べたときに、日本を特別なケースとして評価しうるのかどうかということです。

○佐藤 ポストコロニアルという言葉は、ドイツでは最近移民問題を研究する比較的左派系の研究者が移民に対する差別を論じる時などに使っているのを見たことがあります。しかし、ドイツは基本的に第一次大戦で植民地を失っていますので、植民地の問題やポストコロニアルな問題は、イギリスやフランスなどに比べればそれほど大きな問題としては出てきていないと思います。もちろん、一部の人は問題にしますけれども、広く例えば政治問題化するとか、そういう場面というのは僕の知る限りほとんどないという感じですね。旧植民地からの移民というのもほとんどいませんし。そのかわりにあるのが、ナチス支配の時代の例えばポーランドなどでの侵略・支配の問題というのはありますけれども、それもポストコロニアルという枠組みで語られてはいないんじゃないかなと思います。

○朴 アフリカの植民地とか……。



○佐藤 ありました。

○朴 でしょう。ですから、そういう関係への意識があるのかを知りたいです。

○佐藤 アフリカへのポストコロニアルな意識ですね。第一次大戦前の植民地研究をやっている研究者をのぞけば、僕の知る限りはないと思いますね。英仏とかに比べるとドイツは植民地支配から来る負の遺産は背負っていないというような見方みたいです。

○西 どちらかがましかという、そういう議論にすぐいっちゃうんですね。

○佐藤 そうかもしれません。というか、やはりナチスの問題が大きすぎます。

○鶴戸 その件に補足をする、多分ポストコロニアルっていうのはある種のコロニアルな構造が残留しているということであって、アルジェリアは国家としては認められないような屈辱的なことだと思うんです。むしろフランスのほうでよく言われるのはネオコロニアリズムの問題で、特に経済的な形で、西アフリカなんかが独立後延々とフランスの大資本によって経済支配されているという問題はあるし、コートジボワールなんかだと例えばフランスの軍隊が駐留していますよね。

○西 内戦が起こるとフランス軍が行っちゃうわけですからね。

○鶴戸 行っちゃうし、軍隊いるんですね。駐留部隊が米軍基地みたいな形で西アフリカにはいますし、何かの問題、この前マリでのイスラム過激派の問題のときもフランス軍と一緒に入ってからマリ軍と一緒に活動するというような……。

○西 だから韓国が今日本の軍事拡張を恐れているのは、そうなることを多分恐れているんだと思います。

○鶴戸 そういう軍事的なある種の従属関係のほかに、もう一つ多分大きいのは、特にセネガルなんかだと植民地時代に入ってきたレバノン人買弁がいまだに残留して物すごい経済的支配を行っているという問題があって、もともと中東でドラゴマンと言われていたある種の買弁ですよ、通訳として現地民との間に入って全てを差配するというのが。実はこれフランス植民地にレバノン人が結構入っていて、西アフリカは典型的なんです、その植民地時代に入って中間層として巨大な富と権力を築いたレバノン人が独立後残っていまだに経済支配をしている。

○西 業者ですね。

○鶴戸 レバノンではいま世界のレバノン人成功者を集める会を開いていて、そこにカルロス・ゴーンみたいな人が行くわけですが、そこではむしろ西アフリカの大使なんかやってくる「レバノンの人間のいる我が国にぜひ世界のレバノン資本の投資をお願いします」と言ってくるそうなんです。もう二重にも三重にもなった経済支配をお願いしに来るというような状況が今起こっています。

○朴 『帝国の慰安婦』という本で、日本に向けて、謝罪と補償をめぐって何らかのことができれば、世界に先駆けて帝国主義を乗り越える試みになる、と書きました。きのう中山さんの話を聞いて、もしかしたら自分で意識した以上に本当にそうかもしれないという気が改めてしたものです。にもかかわらず今世界的に慰安婦問題をめぐって過去清算をしていない国として呼び出されていますね。こうしたずれについても考えたいものです。もし本当に、政治・思想的に進んでいるのだとすれば、欧米のことを参照しつつ、何らかの思想や政治を生むことが、この東アジアという地域でできるのではないかと思っただけのことです。

90年代のアフリカや東ヨーロッパあたりでの内戦も、もとをたどればやはり植民地時代における分裂ゆえの事態ですよ。韓国の場合を考えても、韓国戦争というのは単なる冷戦だけではなく、植民地時代に淵源のある事態と考えています。つまり日本に協力した保守と、抵抗した左派との葛藤プラス階級的葛藤。もとをたどれば、構図的には左翼と右翼の分裂・対立なのに、民族派・親日派などの名前で殺されたりしたわけです。そういうことがあるものですから、欧米の場合を伺ってみました。ありがとうございました。

○西 幾ら話しても尽きない感じになってきていますけれども、とにかく今の朴さんの提言というのは、やはり特にここに集まっているような我々が考えなきゃいけない問題だということだと思いますし、実際、朝鮮半島は本当にかつての日本の植民地支配といろいろな向き合い方をしてきた人々が2つの国を今つくっていて、また韓国は韓国でその中にも幾つかのグループがあって、それこそイ・スンマンとパク・チョンヒというのは全然違った経歴で韓国を担った人たちで、韓国の中にある根深い分裂というのも特に今年は韓国史を問い返す年になっているので見なきゃいけないのかなと思いますけれども、特に今ちょっと名前が出た中山さんと小倉さんには一言ずついただきたいなと思いますし、最後にマイク回しますが、どなたかどうしても質問したい方いらっしゃいますか。誰に対してでも結構ですけれども。

○福島 初めまして、福島と申します。今駒場の修士課程の2年生で先月修士論文を出して、専門はマルティニークの文学をやっています。

浅野先生にちょっとお伺いをしたいんですけども、先ほど、故郷権のお話の中で、人間は生まれたところに結局帰りたいのではないのかというお話があったんですが、ちょっとそれはひっかかったんですが、つまり森崎和江さんのお話の中でも、生まれたところがルーツだとは言えないというような話があったと思うんです。本当に生まれたところが故郷だと言えるのか、あるいは故郷権というのはそもそもどれくらいまで続くものなのか、二世、三世にも故郷権というものが降りかかってくるのか。あるいは今ドイツのお話の中で、二世とか後続世代がもとのディアスポラとか、あるいは故郷を失ったという経験について語りたくないというようなことが発表の中でもあったかと思うんですけども、どこまで故郷権ってさかのぼれるのかなというのがちょっと気になったんですね。僕なんかマルティニークのことをやっているわけですけども、例えばエメ・セゼールは自分の故郷がマルティニークであるということはある意味確信を持って入れてしまうわけですけども、同じぐらいの年に生まれたラファエル・タルドンなんていうこの人は白人と黒人の混血のベケなんですね。この人なんかは何冊か本は書いたにもかかわらず忘れ去られていったりするわけです。こういうことを考えたときに、故郷権の問題というのは一概に生まれだけでは言えないのかななんていうふうに思ったんですけども、ちょっと教えていただけないでしょうか。

○西 故郷権というのをきちんと定義できますか。

○佐藤 難しいかもしれないですね。

○浅野 全然しっかりと議論の上にはありませんが、私の友人でも全国を点々とするサラリーマンのご家庭で生まれた方は、自分には故郷がないというふうにおっしゃいます。ディアスポラで故郷を失ったグループというのはよく出てきますから、故郷というふうには呼べるようなものを持っている人と持っていない人というのがいるのは明らかだと思います。

私はそれぐらいしか言えないです。時間のむだなので、これまでにしておきます。ともかくそれは人権についての論争的な概念であることは確かでしょう。

○佐藤 これは恐らく被追放者団体連盟の公式の見解なのかもしれませんが、故郷権というのは個人の権利ではなくて民族集団の権利であると。ドイツ語で Volksgruppenrecht という言葉がありますが、故郷権もまさにこれです。民族集団が文化的に何世代にもわたってつくりてきた文化であるということを考えれば、当然第二世代、第三世代にもその故郷権はあるというのが彼らの考え方だし、それは個人の権利を越えたものです。それからもう一つおもしろいのは、ドイツには先ほど言いました被追放者法というのがあるんですけども、この被追放者の地位は世襲できるんですね。だから実際に経験していないような人も被追放者になれるんです。ただ、実際のところは被追放者団体連盟を見れば明らかなんですけれども、だいぶ高齢化しておりまして、若い人たちの活動もあるにはあるんですけども、大体ドイツ語で経験世代とかと言いますけれども、追放を経験した世代が中心です。3年前ぐらいまで会長やっていたエリカ・シュタインバッハという人がいるんですけども、彼女は西プロイセンに生まれて、1才か2才の時に追放を経験しているため、本人は追放の記憶がないそうです。また両親も戦争中に西プロイセンにやって来た人たちです。そのため会長になったときに結構批判されたんですね。真正な被追放者ではないのではないか、と。それに彼女はこういうふうに答えました。追放というのはドイツ民族の問題であると。だから将来は被追放者連盟の会長は全く被追放者と関係のないドイツ人がなっても構わないんだという、そういう言い方をして、まさにドイツ民族の民族集団の権利としてとらえている。ただ、もちろん故郷と感ずるかどうかというのは個人の問題ですから、それで実際のところ60年代、70年代からだんだん若い人が参加しなくなって、活動に活力がなくなっている感じではあります。なので、公式の見解で実際のところとズレているという感じでしょうかね。しかし、集団としての民族の権利という考え方は、ここで重要だと思います。

○西 僕なりに整理すると、20世紀の歴史の中で、ある程度の期間そこに住んでいたにもかかわらず、本来ここはあなたの住むべき場所ではないと言われたがゆえに追放された人々というのが一定数いて、本来そこに在るべきでなかったはずだけれども、居座りつづけている人も世界じゅうにはいっぱいいるわけです。例えばアメリカ大陸から白人を全部追放する、あるいは白人が連れてきた黒人も、あなたたちが本来ここにいるべきではないというのでアフリカに帰れというふうに追い返されたとしたときに、その黒人たちは当然アメリカ大陸を故郷だと思っていますから、エメ・セゼールも含めて。彼らは故郷権を多分主張するだろうと思うんですよね。だからその追放というのが全ての人たちに及んでいるわけじゃなくて、一部の人たちにだけ降りかかった運命になっていて、ただそういう圧力というのは常に世界じゅうに蔓延していて、それとの戦いがずっと世界じゅうで繰り返されているというふうな印象を僕は持っています。

○小倉 京都大学の小倉です。きょう、物すごいおもしろい話を聞かせていただいて、すごい刺激を受けたんですけども、アメリカの支配と反支配、思想のことでいえば、私は若干こういうふう思うんですよね。つまり、きょうのドイツの話と比べてみて、日本の場合はアメリカに支配されたからじゃなくて、アメリカだけに支配されちゃったからいろいろな思想が出てこなかったという、そういう可能性もある。つまりドイツは2つに分裂したわけですね。日本

は分裂しなかった。アメリカだけに支配されちゃったということで、ドイツは先ほどからの話を伺っていると、2つに分裂したことによって被追放なのかどうなのかとか、ソ連との関係においていろいろな考え方がドイツの中で対立する形で出てくる。他方、日本の場合はアメリカだけに支配されてしまったんだけど、精神的にはソ連とアメリカに支配されている、ソ連に支配されている側は、私の言っている日本型ポストコロニアル理論という非常に善悪2分論型の植民地反省の思想が非常に強く出てきたわけですね、研究者を中心として。これはソ連に支配されて、実際は、国土は分断されていないけれども、精神はソ連に支配されているという、そういうタイプの人かもしれない。だから、日本の中でも実際に思想の対立はあったんだけど、それが明確な線のラインとして出てこなかったところに問題があったんじゃないかと。だからリベラルの分裂とかいうけれども、その戦後思想のメインストリームはやっぱりアメリカに支配されている側ですから、ソ連に支配されている側とはやっぱりそもそも肌合いが合わなかったと、それがドイツはもっと明確に出てきたんだろうということだと思います。

それから、西川さんのおっしゃる「植民地忘却」という言葉は、もう一つの別の言葉で私たちはとらえ返さなくちゃいけない。きょうの議論も出てきたけれども、ヨーロッパに比べると、私たちは決して植民地を忘却はしていなかったということはある程度言えると思います。だけれども、何を忘却したかという、植民地の全体を忘却しちゃった。つまりある面、つまり贖罪的な面は忘却しなかったけれども、贖罪的でない植民地の側面というものは忘却してしまったという、これがやっぱり問題じゃないかと、それに対するバックラッシュみたいなのが今出てきているんじゃないかというふうに思います。だからこれは西川さんとは全然違う話なので、西川さんは怒るかもしれないけれどもね。

それから、故郷権の問題、非常におもしろかったですね。私が思ったのは、ドイツはやっぱり自分たちがどうやって再定義するかというので、自分たちの思想的な資源をフル活用している。恐らく先ほどの集団的な権利だとか、あるいは文化との関係というのでいえば、故郷権というのは恐らくロマン主義との関係が非常に強いんじゃないかと思うんですね。でも日本だっているいろいろな思想があったにもかかわらず戦後それを忘れてしまった、収斂化させてしまった、思考が停止してしまっただけのところがあって、植民地に対しては贖罪感だけがあったと。もっと思想資源があったはずなんです。それを使えなかったというところが問題だったと。

それから、フランスでいえば、フランスは戦勝国ですから、アルジェリアとの関係がそういう感じになったと思うんですね。だから日本がもし戦争に勝っていればどうだったのかと韓国人結構言うんですよ、この話。100年してみれば、韓国は完全に日本に同化していたと。韓国人の冗談で、かなりポストの高い人だけでも、A級戦犯に一番感謝しなくちゃならないのは韓国人だといいますよ。A級戦犯がいたから日本が減ってくれたと。あれA級戦犯がいなかったら100年もしないうちに50年もたっていれば完全に韓国人は日本人そのものになっていたというわけですね。だから戦争に勝ったか負けたかというのは非常に重要だというふうに思います。

それから、質問もあるんですけど、後でもし時間があればするとして、もうちょっと方法論の点でいうと、何か人間というものがあらかじめあって、それがいろいろなことを感じたり書いたりするというような思考方法になっているんじゃないかなというふうに思うんですけ



れども、本当に人間というものがあらかじめあったかなと、恐らく20世紀のヨーロッパにはもう人間という人たちが生きていたのかもしれないけれども、20世紀前半の東アジアには人間というものがいたというよりも、ある階級の例えば奴婢、奴婢が解放がされたのは1897年ですから、朝鮮においては。それからまだ時間がほとんどたっていないときに、人間というよりは奴婢的な世界観を持った人たちがいたし、日本人でもそうでしょう。いろいろな階級だとか性別だとか、そういうようなものによって人間の形をしているけれども、何らかの世界観の混交状態で生きている存在者というのがいて、そういう人たちがいろいろなことを感じたり書いたりしているはずなんですよ。そこをもう一度方法論的にとらえ直す必要があって、だから丘の上と丘の下に住んでいるだけけれども、そこにはやっぱり人間が住んでいるというよりも何らかの世界観の混交状態の生命体というものがいたというように考えたほうが私はもうちょっと記述ができるんじゃないかなというふうに思っているけれども、まだこの記述の仕方というのは非常に繊細なものですので難しいんじゃないかなというふうに思います。

それから、あと2つだけ申しわけありません。ディアスポラという概念を安易に使うことを私の同僚のユダヤ思想研究家は戒めているんですけども、基本的にはディアスポラというのは罪なんですよ。罪を犯したと言われて出ていかなくちやならない人たちなわけですね。だからそういう意味でいえば、朝鮮や満州から日本に引き揚げた人たちこそディアスポラであって、お前たちは悪かったんだ、悪いんだ、だから出ていかなくちやいけないんだと言われたわけですからね。ディアスポラというのはユダヤ的な非常に狭い意味でとらえるとすると、引揚者こそがディアスポラじゃないかという感じもいたします。

それから最後に1つだけなんですけれども、私は浅野さんがおっしゃったこと本当にそのものだと思っていて、日韓モデルという言葉で定義しているんですけども、日韓が戦後にやってきたこと、韓国の解放後にやってきたことというのは、いろいろな要因があって非常に難しかったけれども、だけれども、曲がりなりに植民地の反省と何らかの和解というものに向かって、歩みは遅かったけれどもやってきたことなんですよ。これを日韓モデルという言葉で言ってみるとして、だけれども、日韓モデルの欠陥はやっぱり1965年の日韓基本条約のときに植民地の反省がなかったということ、これを日朝モデルというものに昇華させて日朝国交正常化するときには植民地主義の清算というか和解、反省というものをもっと織り込んで、首相の謝罪の言葉が入った日朝国交正常化をやれば、これは非常に世界のモデルになるんじゃないかなというふうに思っています。ありがとうございました。

○中山 京都大学の中山と申します。

きのう参加なさっていた方はご存知だと思いますが、サハリン（南部が旧日本領「樺太」）という島の研究をしまいいりました。今、小倉先生は同僚であり、階級的には上司に当たるのであまりたてつくような発言はしたくないのですが、日本は戦後アメリカにしか支配されなかったという認識は誤りだと思います。なぜかといいますと、千島列島（ここでは、歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島のこと）は、日本は領土放棄していませんが、いまだにロシアの実効支配下にあるからです。私はおととい千葉県にいて、1951年までソ連施政下の千島で暮らしていた方と会ってきました。彼はその後サハリンに暮らしています。実は引揚げのときに樺太は特殊性がありまして、かなり長い、人によっては4年間ソ連社会を生きています。ということで、

多分朝鮮とか満洲とか見た限りではかなり混乱の中で逃避行という形で引揚げが位置づけられていくんですが、樺太については実は日常が生まれるんですね。実質的には2、3年の人が大半なんですけど、ソ連の行政機関ができて、そこでソ連人の上司のもとで仕事をして、ソ連人の校長先生がいる学校で日本人の先生から学んだりする。でもそこでソ連式の民主化を受けるわけです。樺太の引揚者が興味深いのは、彼らは49年までに帰っていますから、まだアメリカの占領下の日本に帰ったはずなのに彼らはそれを占領と感じていないんですね。彼らにとっての占領はソ連による占領であって、彼らは祖国に帰ってきたからアメリカの支配というのを全く認識していない。それは内地（ここではポツダム宣言で定められた地理的主権範囲）の人々とは全く違う認識です。彼らはソ連には支配されたという認識があるのに、アメリカに支配されたというのは感じていないというのはちょっとおもしろい現象かなと、まさに日常性という問題もありますし、そういう意味ではやっぱりちょっと忘れてはいけないことかなと思いますし、あと私は北海道出身なので、千島、樺太のことをかなり敏感に認識するわけですが、やっぱり引揚げてローカリティが強い、特に北海道については強いわけですね。あと沖縄、台湾。それはかなり見失ってはいけないことだと思います。

あとついでに言いますと、戦後の反戦・反支配の思想の問題においては、さっき小倉先生がおっしゃったように、東側ファクターをかなり忘れてる例がある。さっきさりとおっしゃられたように、アメリカの支配しか見ていなかった。今千島がロシアの施政下にあるということも右翼は一生懸命考えるんですね。じゃ（日本共産党を除いて）左派の人、リベラルはちゃんと考えたかと、多分考えてこなかった。これはかなり反支配のとかの問題に関しては大きな影響があったんじゃないかと思います。象徴としては「パックス・アメリカナの終焉（とひきこもりの国民主義：西川長夫の〈新〉植民地主義論をめぐって）」を酒井直樹先生が2015年に『思想』（第1095号）に書かれましたが、ソ連による世界的な支配、東欧諸国に対する支配という問題を全く書いていないということ、あれは、私はやっぱり日本思想界の酒井先生を日本思想界と言ってよいかわかりませんが、大きな見落としだと思いますし、特にソ連が崩壊して以降、（旧ソ連圏の専門家を除けば）誰もソ連を考えなくなった、日本では。それはやっぱり大きな問題だと思います。

あと、長くなってすみませんが、故郷の問題ですが、一つはドイツとの比較ですね。（日本の外地では）台湾でも長くて50年ですね、終戦時で。台湾でも1895年に生まれた日本人がいたとすれば、彼がようやく50歳。会社でようやく幹部クラスになるぐらいなんですね。すると朝鮮、樺太、満洲はもっと短い。樺太で言いますと、終戦後の引揚者運動を引っ張っていたのは戦前の官僚とか有力層だったわけです。彼らは樺太で生まれたわけじゃない。だから彼らにとって樺太は何かという故郷じゃなくて自分の青壮年時代と資金と力を投資した場所ではない、故郷じゃないわけですね。それが故郷という観念の違い、ただ今健在の引揚者たちはやっぱり故郷と思っていますから、それで「故郷樺太」という言葉が出てくるわけです。ドイツとの違いというのはそのあたりにあるだろうと思います。

あとはお墓の話なんですけど、私ちょうど今実は樺太の墓参とか慰霊碑とか墓地の研究をしまして、樺太の場合ですが、実は分骨という形ですが、亡くなった方が樺太の出身地に骨（遺灰や遺品）を埋めている事例はあります。ただこれはソ連政府やロシア政府にきちんと埋葬許

可をとったかどうかは別にして、そういう事例はありますし、たしか台湾でも散骨の事例はあったかなと。日本で亡くなった湾生、台湾生まれの日本人の方がやっぱり台湾で死にたいというところだけでも、骨を埋めたいとか、自分の骨を返したいということで散骨した事例はたしか何かで見たような気がしますので、調べれば結構そういう事例というのはあるかもしれないと思います。

あと最後ですが、植民地主義の贖罪の問題ですが、よくヨーロッパのイギリス人とかフランス人の話を聞いていると、ヨーロッパはそんなこと余り考えていないみたいな話をよく聞くんですが、アフリカか太平洋の国かどこかで、たしかフランスに支配された地域が植民地支配何百年の賠償をしろという裁判を起こしたというニュース（カリブ海諸国が植民地統治と奴隷貿易に対する賠償と謝罪を英仏蘭などに求めることを検討しているという the New York Times の 2013 年 10 月 20 日付報道のこと）を見聞きしたことがありまして、私はその後を追っていないんですが、あれはやっぱり大きな問題提起で、いわゆる古い言葉ですが、南側世界というのがそういうことを突然言い出したときに、先進国は困るという事例がありまして、そういう意味では日韓モデルみたいなものが実現しかけたときに、実は日韓だけの話じゃなくて、アメリカ、フランス、ドイツ、イタリアとか、その辺のいわゆる旧西欧列強たちによる圧力みたいなものが、もしかしたらあるのかもしれないみたいに思っていて、それぐらいの大きな世界史的な出来事になることを覚悟しながら我々もいろいろな準備をしていかなければいけないのかなとちょっと思っている次第です。

○川島 京都大学の川島と申します。私はドイツ文学の人間でカフカが専門なので、皆さんご存じカフカの文学というのは、もやっとした、ぼやっとした植民地空間の文学で、それを植民者の文学として読み合わせようという研究の流れがあって、私はそれに乗かって自分の博士論文を書いたんですが、その流れで、きのう、きょうのお話と関連づけると、カフカの文学は引揚げたいんだけどどこに引揚げたらいいかわからない、引揚げられないでいた人間の文学と言えるのかなという、そういうことを思いながら拝聴していました。

私は非常に漠然とした、ちょっと大きな質問があって、必ずしもきょう答えていただかなくてもいいかなと思いますけれども、聞くだけ聞いていただければと思います。それは引揚げ文学がそもそも何かという定義に関することで、朴さんのほうで必ずしもはっきりと定義がなされているわけじゃなくて、基本的には引揚者による文学を想定されているのかなと思います。例えば五木寛之が書いた作品で、必ずしも引揚げがテーマになっていない作品もたくさんあるだろうし、逆にいえば、みずから引揚者でない作家で引揚げをテーマにした文学というもの、恐らく今後出てくるかもしれないし、既にあるかもしれないということで、そのあたりをどのように考えていらっしゃるかというのをお聞きしたいなというふうに思いながら聞いていた次第です。例えば、中山さんがきのうお話しされていて、フィクションと手記というのを分けたのに対して、朴さんのほうから、そんなに単純に二分法が現在の分野研究では通用しないよという、そういう返しがあったかと思うんですが、基本的にはお2人とも引揚者というのが当事者になっていて、当事者による文学という枠組みの中で語っているように見えたので、その点ちょっとずれる、その外側にいる、必ずしも当事者と言えないような人間が引揚げをテーマにして語るような文学という、そういうものについてどういうふうに考えたらいいかという、簡

単に答えていただけるならと思いました。

○西 朴さん、どうですか。

○朴 定義をするというより、本の中で対象にしたのは、例えば安部公房とかは実際の引揚げを体験しているわけじゃないけれども、満州帰りであって、そういう体験をしている人の中では古いほうなんですね。同じ引揚げ経験者といっても、世代によっても違うという話もしました。そうしたなか私がここで二世に特に感情移入してしまったのは、本にも書きましたし、今日話題になった故郷権の問題ともつながりますが、なれ親しんだところを突然追い出される。しかも二十歳以前、10代に。まだ何も知らないうちに突然なれ親しんだところを追い出される体験について考えてみたかったからです。一世と二世との根本的な違いというのは、そこで無邪気に遊び、風景に慣れ、植民地のたべものを原初的な体験として食べた人たちがどうかということにあります。言うなれば自己形成ですね。植民地の記憶を残している身体を私は植民地的身体と呼びましたが、やっぱりそうしたことに特権を与えたい気持ちがあります。今日の言葉でいえば故郷権を認めるという。

それに比べて、実際には関係ない人たちがそうしたことを「民族体験」として語ったとき、良くも悪くもゆがみがでてくると思います。そうしたゆがみがなるべく少ない語り・文学を重視したい気持ちです。実際にどこまで訴えかけるものを書けるのか、ということともかかわると思います。例えば韓国の学生たちに引揚者のエッセイを読ませると結構感情移入してくれるんですね。私自身も18歳で日本に初めて来ましたが、やはり大学院から来ている人たちとの違いがあると思っています。根本はナショナル・アイデンティティーの問題になると思うんですね。私は学生にも、よく、あなたが韓国人だと思う根拠はどこにあるのかと聞いたりします。そうするとまずお母さん、お父さんが韓国人だからといいます。血統ですね。でも血統だってさかのぼれば曖昧な場合が多い。言葉だって身につけるものであって、生来のものではない。文化だってそうです。血統と言葉と文化というのがナショナル・アイデンティティーを形成する要素ですが、そうした「要素」にすぎないものが、思いを超えてイデオロギーになったりする。そこから外された人たちというのは、そのまま近代の痕跡でもあるので、やはりそうした「当事者」の思いや感情をしばらくのあいだ特別扱いしてつきあいたい気がします。

先ほどの中山さん、小倉さんの話でも、北海道の北方領土の問題というのは日本でいえばみんな知っている問題でも、そこにいる人たちがどのような体験をしているのかはあまり知られていないことに改めて気づかされました。そうしたことは慰安婦問題と一緒にだと思いました。つまりみんな「問題」としては知っており、国民物語にもなるのだけれど、実際のところ、中身はあまり知らない。これにはやはり中央志向的な考え方が作用しているところがあって、中心志向になるとどうしても純血主義になったり民族主義になりやすい。そしてイデオロギーとなって、拡張主義になってしまう。ローカリズムにも、均質化志向があることは多々あって、やっぱり同じ体験をしているかのように見えても、あるいは同じ主張をしているかのように見えても、細かく区分けして耳を傾けることがとても大切、と皆さんの話を伺いながらつくづく思った次第です。

○西 もうこれ以上何か言ってしまうと蛇足になってしまう気がしますけれども、一言だけ



きのうと今日の議論を踏まえて言っておきます。今の川島さんの話につなげますと、引揚げ文学というものを考えるときに、常に未引揚者の文学というものを考えなければいけないというのは、この朴さんの本の中の一つのメッセージでもあったわけですね。それは我々自身が仮に引揚者でなくても、ひょっとしたら未引揚者であるかもしれないという、そういうふうなポジションを身につけることでこの20世紀に起こったさまざまな現象をかなり自分に引きつけて見ることが可能になっていくんじゃないかなというのがこの2日間の僕なりの印象です。

奇しくも川島さんがおっしゃったように、カフカがどこに引揚げていいのかわからない、そういう人だったというのは、まさにそういうことだと思うんですね。つまり自分が今いる場所に対するこだわりがあるけれども、しかし、今いない場所に対する何か別の執着というものが存在していて、まさに身を引き裂かれるような、そういう生というのが世界に遍在していて、にもかかわらず、まさに朴さんが学生さんに質問されるときに、多くの人は自分は韓国人の親を持って韓国に生まれて韓国語を話していてキムチを食べているから韓国人だと、そういう人たちの身体感覚が常にドミナント、支配的になってしまっていて、それから外れてしまう人に対する想像力というのはすぐに消えてしまう。ちょっと近づいてもそれははねのけてしまうような、そういう力がすごく働いていて、やはりそういうものにちょっとでも近づくきっかけをつくるというのが教育に携わっている人間の使命だろうと思います。また逆に、さまざまな書物を手にとる、自分とは違った人生を生きた人たちの経験に寄り添うということを可能にするのは、まさにそういうはじき飛ばされるような人々の生を身近に感じるということに多分なるんだらうと思うので、きのうも言いましたけれども、朴さんのこの提言は、当然日本に住んできた我々にも響きますけれども、これが韓国でまたどんなふうな反響を呼ぶのかという、それはとても楽しみなことでもあります。

それでは、充実したディスカッションに参加して下さった皆さんにお礼を述べて、二日間のイベントを閉じたいと思います。ありがとうございました。

